

令和6年度 第3回学校運営協議会 記録

1 日時 令和7年2月19日（水）午後1時15分から3時まで

2 会場 静岡県立藤枝特別支援学校 多目的学習室

3 参加者

（1）学校運営協議会委員

委員A、委員B、委員C、委員D、委員E（欠席）、委員F（欠席）、委員G

（2）本校職員

校長（岩附祥子） 副校長（若杉友美） 教頭（小林雅樹）

事務長（新澤健一） 小学部主事（采女靖彦） 中学部主事（神原秀晃）

高等部主事（中村研司） 肢体学級統括主任（二俣康明）【欠席】

教務主任（鈴木裕） 地域連携課員（松崎克矢）

4 内容

（1）開会（進行：副校長）

（2）会長挨拶

（3）校長挨拶



<進行：会長>

（4）**テーマ1** 令和6年度学校運営の評価・来年度に向けた課題

① 令和6年度学校内評価（評価と課題）【副校長 資料の説明】

② 令和6年度保護者評価（評価と課題）【教務課長 資料の説明】

③ 質疑応答

【委員D】：説明、ありがとうございました。毎回、この会議で発言したことがきちんと改善されていくのがわかりますので、発言し甲斐があるなと思います。12ページの保護者アンケートですが、全体的にAB回答が多いということですが、無記入の人がどの項目にも45人程度います。統計学的にも、もしかしたらこちらの中にCD回答の方がいる可能性があると思います。データの扱いとして、95%がAB回答としてしまうと語弊が出てしまいますので、この45人程度の方についての説明をしていただきたいです。

【教務課長】：ありがとうございます。アンケートは携帯電話等で答えられるものとなっていて、それを保護者は全員受信しています。その中でアンケートを開いていない、もしくは開いていても回答していなかった保護者の方が 45 名程度いたということです。本校は現在、339 名ですですのでそこから 45 名程度を抜いた 294 名程の回答で A から D 回答の割合を出しているという形になっています。

【委員 D】：このような調査は無記入の方の方が不満を持っていたり、無関心であったりしている可能性が高いと思われますので、この方たちにどうアプローチしていくかが必要かと思います。例えば紙ベースでお配りするなど。あとは、このような報告書を出す際は、「回答者のうちの 95%」と表記した方が正確かなと思います。45 名というのはかなり大きい数字かなとも思いますが。

【教務課長】：ありがとうございます。回答のなかった方々には、紙面でもお渡しをしています。例えば、外国籍の保護者には更にローマ字を振って渡したり、回答期限がありますのでそれを過ぎても回答がない方には再度紙面をお渡ししたりしています。ただ、それでも返答がなく、中には不登校の児童生徒もいますので、無理強いは難しいと感じています。

【委員 D】：そういうことは承知しているのですが、やはりそういう人たちに対するアプローチも必要なのかなと思います。

【副校長】：ありがとうございます。そういう方々には色々なアプローチをしているのですが、このアンケートに関わらず日常的にそのような傾向があつたりしますので、学校とのやりとりの関係性を崩さずに、塩梅を考えて対応しています。ただ、何度かトライをして結果的に同じ割合になってしまったとしても、先ほど委員 D がおっしゃったように「回答者のうちの〇%」との表記は取り入れていきたいと思います。

【委員 B】：今、無記入の方がこれだけいるということでしたが、去年はどうだったのでしょうか。例えば、こちら（藤枝特支）に 9 年間や 6 年間通っている保護者さんが、去年もこういうのに無関心や、アンケートにタッチしていない方がいたのかどうか。今は携帯等で簡単に回答ができるが、実質本当にアンケートに回答してくれる人を追及した方が良いのではと思います。45 人も無記入がいると考えるともっと確実なデータが欲しいと思うかもしれませんが、私が言いたいことは、無記入の保護者さんは学校に協力的であるのか否かという捉え方もできるのかなと思いました。

【委員 A】：私も PTA を長くやっていましたが、我々の時代の頃は男親が 1 割も参加していないという状況でした。全部、お母さんに任せていたというのが実態だったと思います。ですからアンケートにあたっても、いつも接しているお母さんが自分なりに

考えて回答しているということもあるのかなと思います。家庭の本当の姿が見えてこないというのは今でもあると思いますし、その辺に立ち入ることが良いことかどうかはわかりませんが、間違いなく回答の違いは父兄の方にあると思います。活動の状況だけでなく地域との交流となったときに、またお父さん方の姿が全然見えないといった状況にならないように良い方法があれば、また検討していただきたいと思います。

【委員D】：テクニック的な話になりますが、アンケートはその場でやる方が圧倒的に回答率は上がります。本当はゆっくり回答してもらうのがベストなのですが、例えば保護者会の集まったときにその場でQRコードを出して実施するなどして回答率を上げるのが鉄則かなと思います。

【委員G】：今回、アンケートの結果のところではBもCも注目されたことは昨年自分が話したことが反映されていて、嬉しく思います。結果について課題感を持って運用を考えているということで今後もっと良くなっていくのかなと思います。質問になりますが、アンケートの項目というのは特別支援学校一律の項目なのか学校独自でやられているものなのか。

【校長】：学校経営計画の項目に対して、「計画を立てたことができましたか」といった形で教員には聞いていて、それと関連する内容で保護者にお聞きしています。資料6.7.8ページの今年度の経営計画の取組のことになります。そして、学校経営計画は学校ごと異なります。

【委員G】：毎年異なるということですね。ありがとうございます。定期的に毎年見ていくところと、年度によって変わるものと使い分けていくとどのような変化が見られていくかがアンケートとして重要になってくるかなと思います。地域性に合わせて学校経営計画が作られているということでしたので、柔軟に対応されると良いかなと思います。

【委員C】：緊急時のことに関してですが、保護者アンケートのところでは南海トラフ巨大地震等の震災における対応が余儀なくされると書いてあります。例えば避難訓練等を通して日常的に行っている訓練は目に見えてわかり、評価も良くなっていくのがわかるのですが、日頃から南海トラフ巨大地震情報について職員は本当に全員把握して対応できるようになっているのかということを考えていかなければと思います。本校は、今月入試が行われるときに各中学校に発災時の対応について通知を出した方がよいのではという話題になり、県の入試の要綱を参考に作り、各中学校に配布をしました。その際、本校の入試で以前からずっと使っていたものと内容が違っていました。意識として前のものをそのまま踏襲してきた形になっていましたので、そこはきちんと南海トラフ巨大地震への対応として見直ししていかなければならないと思いまし

た。先程も言いましたが、訓練についてはものすごく意識をもってやれているのですが、このことについてはいい加減になっている部分もあるなと思って見直しをして配布をするという方法にしました。日常から臨時情報等を職員もきちんと把握して、動いていかなければならないと感じました。

【校長】：ありがとうございます。今年度、8月に南海トラフ巨大地震情報が初めて発令されました。その時にやはり混乱したわけです。学校にいた教頭と事務室職員とずっとテレビを見ていました。校長会でもその時の対応、調査情報が出た時、その後解除になる時の対応を話し合いました。一回目の時は、日向灘沖でした。本県から大変離れていて、しかも南海トラフの区域の中で随分端だったこと等を考えた時に、調査情報が出た時は一律にこうするというのはやはり決めにくいと校長間でも話題になり、震源地が自校からどれだけ離れているかが重要かなと思います。本校も焼津分校がありますが、あそこは津波が来るところです。県内では焼津分校と伊豆下田分校が最もハードルが高く、調査情報が出たら直ぐに帰宅させなさいといった指示を受けています。学校の立地と震源地を考えて行動を起こさなければならないということは校長会で確認をしてあるところです。また、夜間に緊急時大急ぎで学校に来るメリットはないと考え、夜間に参集はしないと本校の職員に言っています。学校から近い人は、次の日に様子を見に行つてねと伝え、緊急時の対策要員の指名をし、その後の動きについては校長が指示をするという形になっています。以前見ていただいた厚い冊子の危機管理マニュアルがあったかと思います。職員も全部の内容を把握しておくのは難しいのですが、各種情報が出た時にどう行動するか、それくらいのエッセンスのようなものは今後配っていけると良いかなと思います。

【委員C】：南海トラフについてはホームページかその他で発信していますか。

【校長】：本校のホームページには上がっていません。

【委員C】：ありがとうございます。それについては必要ではないですか。

【校長】：年度初めに各家庭に配っているのは、大雨や風水害の時の学校の休校の基準についてです。COCOOで配信したり紙で配ったりしています。南海トラフのことについては確認をしながら、情報に対する過剰な反応にならないようにしたいと考えています。先ほどアンケートのことで無記入の人が話題になりましたが、お家の方の心の状態の揺れ幅が大きい人もいますので、あまり不安になるようなことだとか、あるいは「～ねばならない」というようにそれを捉えられたとしても、命に関わることになりますので発出の仕方については検討したいと思っています。

【委員C】：なぜそのようなことをお聞きしたかという、県の入試の要綱の中に「臨

時情報が出た時点で中止」とありましたので。

【高主事】：本校も今月の 13 日に高等部入学選考が行われました。県の方からの要綱に、地震やＪアラートの対応というのがあります。それを基に、そのまま使い回せないものもあるので、本校の実態や受検者の実態に応じて一部修正し、受検票と一緒に配布するという形で対応しました。

【委員Ａ】：緊急時の対策というのは、県も市も計画がありますがその時の状況で対応するしかないのかなと思います。その準備だけはきちんとしていただいて、例えば校長先生が居ない時は誰がやる等決めておいて、判断を躊躇する状況が長く続くことが一番悪いことですので、できるだけ早い判断で進めていくことが肝心だと思います。我々も避難所があって避難所の運営契約というのがありますが、これに従って動いていきたいと思いますとなると全て手足をもぎ取られた状態になってしまうので、やはりそこはその時の判断でいきたいと思います。そうしないとなかなか前に進まないという話をしました。

もう一つ、6 ページのヒヤリハットのところの成果と課題に「周知不足が反省点です」と書かれています。この周知については、今後どのような形で行っていくのかお話ししていただけますか。

【副校長】：周知不足というのは、ヒヤリハットの共有の仕方を昨年度とやり方を変えたということについての周知不足だと関係部署は考えています。今年度は、月に一回、「ヒヤリハットと同じことが自分の学年で起きたら、又は起きないためにどのようなことをしたらよいか」ということを学年会で話題にしていこうという取組でした。二回目の協議会の中で、ヒヤリハットについては一往復半のやりとりが必要だと委員の方から御指摘を受け、今から来年度に向けてどのように実施していくか検討しているところではあります。本校は小学部から高等部まであるので、時期によって授業や取組に忙しさ等の差があります。そういうことも影響して、学校全体として同じ温度感でやるのが難しく、関係部署（保健給食課）として全体を想像して対応することが課の責任としてあると考えています。保健給食課員はどの学部にもいます。大事なことなので学部の実状に合わせながら共通理解して、改善すべき環境や人の配置等について発信していくという部分で、周知不足という表現を使ったということでした。

【委員Ａ】：ありがとうございます。共有するというのが一番難しいですね。我々の施設もそうですが、データを集めるところまではきちんとできるのですが、それをどう反映していくかにいっていません。先ほどのＢ評価をＡ評価に変えていくためにどうしていくというような食い込んだ話が学校の方ではありましたが、そのようなことができていないのが実態ですので我々も参考にして取り組んでいきたいと思いました。

【委員D】：これは Google フォームでアンケートを行っているのですか。それでしたら、そんなに調査に時間はかからず、集計も今までよりは楽になっていると思います。答える方も比較的、簡単に短時間で回答できていると思います。なので、自由記述の欄があると良いなと思います。回答者は名前を記入していないのですか。

【教務課長】：本校は COC00 というツールを使用しています。こちらは保護者が欠席連絡を入力したり、学校から配信される学年だよりを見たり、今回のようにアンケートに回答したりすることができるものになっています。ですので、保護者が名前を記入しなくても、学校としては誰が入力したかは把握できている状態です。

【委員D】：こちらの質問内容で記名式だからという理由で影響が出るということはないと思いますが、もし自由記述の欄があるのならば生の声を聞きたいなと思いました。肯定的な答えと否定的な答えがあれば、改善のヒントにつながるのかなと思います。

【教務課長】：どの学部も自由記述の欄でたくさん御意見をいただいています。特に低学年、入学したばかりのお子さんの保護者からは「成長をすごく感じた」、「できることが増えた」などの御意見があります。高等部になると今後の不安が出てきているというところがありました。こちらとしても気を付けなければいけないことは、教員側としては指導として行っていることであっても、保護者の方々にとっては違って見えてしまい誤解が生じている部分もあり、その辺りで厳しい御意見をいただきました。ですので、先程もお伝えしましたが、学年主任にきちんと伝え、誤解を溶いてしっかりと説明していくことをお願いしています。

【委員A】：15 ページの保護者アンケート『学校には相談しやすい人はいますか』ですが、連絡帳のやりとりというのはすごく重要なので、できれば保護者の方にもきちんと書いていただいて、実態を書いてもらうのが一番ありがたいです。先生方が実際はこうだよということを素直に父兄側が聞き取って対応できるような体制づくりが一番子供にとって大事になってくると思います。まずはこのC回答の人数を減らしていけるような指導をしていければ有難いなと思います。

【委員G】：「イ. 授業」の「教職員の専門性の向上」というところで「藤特版専門性チェックシート」というものがどのような設えで、運用ではどのように使われているものなのでしょうか。

【校長】：静岡県の小中高特支の教員に対して示されている「静岡県教員育成指標」というものがあります。採用一年目、五年目等の経験年数によって求められている資質能力が示されている指標です。私たち教職員はそうならなければならない、そういう

ことが求められているというものです。その資質能力がその年数で備わっているかどうかを具体的に示しています。例えば授業だったら、児童生徒の学びを深めている、同僚に指導・助言を行っている等があります。他にも生徒指導のことや組織運営のこと等でチェックをして、自分はどれがどこまでできている、いまひとつのところがあある等を確認して色々な研修を受け、主体的に学び専門性を伸ばすというためのシートとして昨年度末作成をして、今年度から使い始めたところです。少しアナウンスが足りなかったのも、私としてはもう少し高い数字をイメージしていたのですが結果的には88%ということでした。

【委員G】：ありがとうございます。この項目というのは、企業と教育とは違うとは思いますが、昇給等の評価項目と連動するという認識でよろしいでしょうか。

【校長】：項目としては似ているところもあります。

【委員G】：このシートを使って上司からのフィードバック、定期的な観測や自己評価、上司からの評価のようなものはあるのでしょうか。

【校長】：年度当初に自分がチェックをして、どの項目を頑張ろうかなというものがあります。9月にシートに中間状況を直接書き、年度末にもう一度自己評価をするという仕組みです。それに対して客観性が無いとか、謙虚な人ほど低い評価を付ける等の話題もありましたが、とりあえず本人が感じたことをそのまま書いてもらうということとし、今年度はそれに対して管理職が何かコメントするということはしていません。それとは別に人事評価の制度として、年度末に面談をします。これとつながっている人もいればそれとは別のところで自分の目標を立てて取り組んだ先生方もいますので、直結はしていません。つながっていくとより効果的ではないかなという意図でチェックシートを行っています。

【委員G】：ありがとうございます。昇給や人事評価と内容として連動している方がより頑張ったものが最終的に評価されるという形になってくるかなと思います。学校として先生として、この項目を覚えなないといけないということを示している部分もあると思いますので、合わせた評価制度とした方がこれをやる意味というか一人ひとりの意識はより高くなるのかなと思います。フィードバックの重要性というところもありますので、そこは定期評価のところでフィードバックされているのかもしれませんが、何をもってこの評価だったのかを示した方が良いと思います。自己評価だけでは自分ではできているという感覚で成長が止まってしまうので、しっかりと客観的な評価を入れてあげることは重要かなと思います。

○副校長より関係者評価についての説明

休憩（15 分）

（5）テーマ2 令和7年度学校経営計画「目指す学校像」について

【校長】：令和7年度学校経営計画書（案）となります。目指す学校像は今年度と同様に、『ひびき合い、つくり合う』中で、自立に向けて力強く生きる人を育てる」となります。知的障害、そして知的障害と肢体不自由のある児童生徒が通う、あるいは自宅で学んでいる子供たち一人ひとりに、こんな力を付けて育てていければと考えています。（計画案の）次の三行は、自立に向けて力強く生きるという言葉の意味合いについて丁寧に説明した文言となっています。「児童生徒が教職員や地域の人々、児童生徒同士とひびきあい、よりよい学校や地域、それぞれの生活をつくり合う中で自分らしく、なりたい自分、自立に向かってしなやかに取り組み、自分の持てる力を発揮できる力強く生きる人を育てる」ということで、本校の教職員が同じ目当てに向かって進めるよう少し解説のようなかたちで書いています。これは今年度と同じとなります。（2）は、この目標を具体的にしていくときの柱として三点の項目で挙げてあります。太字で書いてあるところは、今年度と少し変えてあります。今年度は「効率的に」という言葉を入れたのですが、効率的というのがむしろに減らしていくというイメージを持ちやすいのかなと思います、来年度は目的を明確にした「効果的な業務遂行」ということにしました。何のためにこれをやるのか、そしてそれは児童生徒あるいは教育活動の中でどのように子どもの成長につながるのか、そんなことを考えながら日々の業務を遂行してほしいという願いを込めています。柱の三点は「安全・安心」「授業」「連携」の三つです。これは今年度と変わりません。「安全・安心」としては、一つ目に、「命を守り、人権を尊重した安全・安心な学校づくり」。こちらは今年度と変わりありません。二つ目は、今年度こちらに「効率的な」という言葉を入れていましたがそれよりも安全安心に特化したような言い方に変えたところです。「教職員が安心して業務を行い、児童生徒の学びを支える安全な学校づくり」としました。先生方お一人お一人の心理的な安全性の中で子供たちを支えていく、授業をしていく、そんなような学校になればと思っています。そして、危機管理や環境の面で安全であるべきというところをこの言葉に込めています。「授業」としましては、「一人一人の確かな成長と発達を積み上げる授業づくり」を今年度から継承しています。「連携」は、「児童生徒、保護者、地域、関係機関と共につくり合う学校づくり」これも今年度と同じ言葉でまとめてあります。この三つの大きな柱、「安全・安心」につきましては二つありますが、このようなことを大事にしながら来年度の具体的な取組を考えていこうと思っているところです。令和7年度の経営計画の目指す学校像については以上です。

一つ、先程紹介するのを忘れてすみません。皆様の机に本の贈呈式というプリント

があります。昨日ですが、御縁のある株式会社タイズ様から総額 10 万円程の本を御寄付いただきました。タイズ様から学校へお申し出があり、各学部学級でどんな本を子供たちが喜んで読むのだろうかと相談し、それをリクエストし贈呈していただいたという形です。プリントの一番下にはそれぞれの学部の代表の児童生徒が映っています。とても嬉しそうでした。本を授業で使ったり、やりとりの中で使ったりすることができ、有難いなと思いました。

【委員 A】：ありがとうございました。今、校長先生から来年度の目指す学校像について説明していただきました。皆様から御意見、感想等あればお願いします。

【委員 D】：内容の説明はよくわかりました。やはり、これをいかに共有していくのかということが重要だと思います。忙しい中で目の前の事に追われるわけですが、どんな風に強化していくのか、ディスカッションしていくかなどの計画があれば教えてください。

【校長】：ありがとうございます。次の第 1 回（学校運営協議会）の時には具体的にどんな形で経営していくのが出てきます。今、学校では何をしているかと言いますと、その具体は作成してあります。ここにいる学部主事がそれを受けて、小学部段階ではそれをどうやっていくか、中学部段階では、高等部段階では、そして肢体不自由のある子どもたちにはどうか、というところの具体的な計画まで出されており、それを全校の職員に確認しているところです。それぞれの学部にはその集団として、30～60 人の職員がいます。その職員の中で共有したものが学部の経営として示されます。そして、各学年ではどうやって育てていくかということになります。学校経営計画から各学部、各学年へとこの思いをつなげていってもらっています。こちらの願いとしては、その次に先程安本様が言ってくださった個人の目標にまで下りて行ってそれを自己評価し、フィードバックしていくと先生方お一人お一人が学校の経営にどのようなかたちで参画し、自分自身がどのくらい伸びていったかというところにつながっていくかなと思っています。そして、先程副校長が「保健給食課」という話をしました。学校の運営の中には学部の業務だけでなく、色々な校務分掌といったものがあり、保健給食のことや、体育的な備品の管理のこと、学校をきれいにするためにといったことをグループ分けしています。次年度の第 1 回（学校運営協議会）の時にはお見せできると思いますが、それらの担当の課を記載して、12 ヶ月を通してどのように実施していくかという計画を今作成し、共有しているところです。

【委員 D】：組織的なフローは、今、御説明いただいてよく理解できました。大事なのは委員 G がおっしゃったように、管理職以外の個人にどう落として日々の教育活動に反映できるかだと思います。その辺り、理想ですが忌憚なき意見やディスカッションできる場所があるといいのかなと思う次第です。

【委員A】：委員G、地域との連携の部分ではどうですか？

【委員G】：先程、校長先生からお話いただきましたが「効率的」から「効果的」に変更されたということがありました。「効果的にしっかりと」というのは考え方として大変素晴らしいと思います。どのように効果的に発揮するかという面では、やはりフローとして学校の指標を基にしっかりと運営して、先生がそれを体現して生徒・保護者の方に伝わっていくというかたちになってくると思います。まずは、先生方がしっかりと理解して行動できるような体制というのが重要になると思います。委員Dもお話されていましたが、共有も重要になってくると思います。どうやって浸透させていくのかというところです。教職員の方、みなさんアカウントをお持ちで、共有できるようになっているのということでもいいのでしょうか。一人ひとりに案内を送って終わりではもちろんないですし、その後のフォローが重要かと思います。一方で教育をするとなると、会議ではないですが集めてやるものと、それぞれで行うもの、web上でやるもの等色々あると思いますが、それらを行うにあたって時間もかかりますので効率も重視していかなければいけないところもあるのかなと思います。その時間を生み出すために何をするかというところも同時に考えていかなければいけないかなと思います。先生方とは違う軸かもしれないですが、スーパーマーケットもどちらかといえば現場仕事です。その場にいてやらなければいけない仕事になってくるので、効率重視だけで系統的に簡潔できるというものではないのですが、一方でシステムを入れながら効率化を図って会議の軽減や時間を削減して職員教育に充てるなどすることが重要かなと思います。最近でいえばA I や、当社でも運営はまだですがチャットG P T の活用も考えられます。今日もそうですが、議事録を作成してもらうこともそういうものを活用するのかなと思います。みなさんも会議でメモ取られていると思いますが、A I を利用すればこの書くこと自体が不要となり、今は話を聞くことに集中するとなれば理解も深まりますので、一つ一つの積み重ねになってくると思います。何かしらの時間を生み出すことは可能かなと思います。先程のアンケートのところでもありましたが、個人への問い合わせは難しいと思いますが、学校の方で決まっているのであればチャットボットを使って回答してもらうことも可能かなと思いますので、色々な手段を持ちながら時間を作ることができればいいのかなと思います。

【委員C】：成果と課題のところの説明があつたのですが、例えば「～ができた」という書き方になっているのですが、なぜそれができたということについて詳しく説明があるといいかなと思います。それと「～を利用した」となっているのですが、これも利用したものの内容等がはっきり示されると、今後このような会議をやった時に「こんな方法もある」「こんなやり方」もあると話がしやすいかなと思います。成果と課題はこれだけの行と決まっていると思いますので、別紙にでも何か書かれているといいなと思いました。

【委員A】：委員B、地域のことで何かありますか。

【委員B】：地域として、お世話になりました。前任の方も本地区代表として一生懸命動いていたはずですが。これがもっとつながっていく橋渡しとして、今年もできたかなと思います。ふじとくまつりも見学には行けず申し訳なかったですが、地域の人も子供さんの顔を見るのが楽しいという気持ちにならないと進まないと思います。（委員の）みなさんは経営者的なお考えをお持ちですが、私は前にも言いましたが「挨拶運動」が大事だと思います。先日も中学校学区の学校運営協議会がありました。そこで私は言いました。「挨拶運動をやることを決めても、子どもは挨拶するけど大人はやらない」とPTAの役員の方に申しました。先程もPTAには男性は来ない、女性ばかりという話がありました。会長を決める時はくじ引き。何となく、寂しい時代になってきたなと思いました。挨拶は大人の方が恥ずかしがってやらないです。その前に、家で一緒に住んでいる家族の中で「おはよう」「いただきます」でも何でもいいですが、そういう挨拶が交わせれば良く、それが基本だと思ってほしいです。ということを中学校の方でも話しましたので、こちらにもつながればいいなと思います。

【委員A】：私たち施設でも、今お話があったようにまず挨拶が当たり前にできるということがスタートラインです。挨拶ができることで気持ちよく生活ができるということです。ここを徹底していかなければいけないと思います。それと、とにかく褒めること。どんな子でも褒めてもらいたい気持ちはあります。長所をうまく引っ張り上げて、子供さんに自信をもってもらおう。明るく過ごせるような方向性を作ってもらえると、みなさんの中に入ったときに直ぐに打ち溶けて作業に入れるし、色々な対応ができるようになるという方向にできるだけ伸ばしてもらえると我々としても有難いなと思います。先程もありましたが、父兄の方がどちらかというと挨拶の声が小さいということもありますので、こちらで学校の方でできるなら指導してもらいたいなと思いました。小中高でも「にこにこ挨拶運動」が当たり前になって、みなさん朝並んで挨拶運動をしています。回数を重ねていけばお互いに慣れてきて、大きな声でお互いキャッチボールができるようになります。その状態になるには少し時間はかかりますが、そこは踏ん張って頑張ってください、できるだけ声が出るような指導をしてもらえるとありがたいなと思います。よろしくお願いいたします。

では、ここでテーマ2を終わりにします。

【副校長】：ありがとうございました。
最後に校長よりお礼の言葉を申し上げます。

【校長】：ありがとうございました。いつもこの会で思うことは、教員の視点ではない

ところからいくつか御意見をいただくことの有難さを感じております。出張先等で「特別支援学校の教員とは」と言って話をしてくることが多いのですが、地域の方や大学、高等学校の方、企業の方たちから、我々がこれは多分いいだろうと思って突き進んできたことに対してこういう視点はどうかなのだろうかといつも教えていただき、大変有難く思っております。今日は、令和7年度の指針に対しましてもいくつか御助言をいただきましたので、上手にそれを取り入れながら来年度また進んでいきたいと思ひます。一年間、この会で御意見をいただけましたこと、大変嬉しく思っております。ありがとうございました。

